

(整形外科)

○仙誉 典子・飯田 裕・増淵 正昭・  
白須 敬夫・森崎 直木

われわれは *N. suralis* の知覚支配領域である足背外側部に疼痛および知覚異常(主として *Hypästhesie*)を認め、かつこの神経の走行部に圧痛を認めた症例を得たので報告する。

症例26歳、看護婦、約4カ月前より上記の症状が出現してきた。足関節を膝関節伸展位で背屈させると痛みのため背屈できず、膝関節を屈曲位にすると背屈が可能であった。最も強い疼痛が誘発されるのは *Bragard* の test を行なつた場合であつた。*Tinel's sign* のある部を0.5%キシロカイン0.5ccでblockするとただちに足関節が背屈可能となつた。*N. suralis* の分枝が癰痕でentrappedされ、このため足関節背屈時強いtensionが加わつて疼痛が誘発されたものと考えられる。解剖学的な走行からしてこの部位の *Entrapmentneuropathy* は、詳細にみれば以外と多いのではないかと思われる。

#### 4. 当科における疥癬

(皮膚科) 前田 健

疥癬は戦後の流行以来、衛生状態の改善などとともに減少し十数年間は希な疾患となつていたが、近年数量的に増加の傾向にあり、当科においても多数の疥癬患者を経験した。昭和51年1月より本年4月15日までに当科において節足動物性皮膚炎と診断された患者は223名、そのうちで疥癬は54名である。54名中男性35名、女性19名で、男性に多い。また32名は虫体虫卵のいずれかが証明されているが、22名は証明不可能であつた。感染経路としては、性交する同居人からが最も多く、次いで友人、保育園内での感染、入院時の病棟での感染もあつた。しかし感染機会も不明が15名あつた。季節的変動を見ると、3月と10月に多く、どちらかというとも夏季減少傾向がある。臨床的に本疾患は角質増殖型、丘疹落屑型、結節型に分けられるが、一般に丘疹落屑型が多く、疥癬トンネルを認めるのが特徴とされている。54名のほとんどが丘疹落屑型であり、17名に疥癬トンネルを認めた。症例1と2は家族6人に感染した例である。症例2は2カ月と2歳の2人の子供にまで感染している。症例3は家族3人の例、症例4は23歳の男性に初発し、次いで同棲者、そしてその家族へ波及し、友人、その同棲者と計6人に感染した例。症例5は同棲中の2人である。本疾患の治療はオイラックスがよい。

#### 5. 左横隔膜弛緩症による胃軸捻転、胃潰瘍の1手術例

(消化器病センター)

○平山 芳文・小林誠一郎・鈴木 茂・  
高崎 健・武藤 晴臣・菊地 友允・  
長岡 巍・喜多村陽一・中村 能史

(成人医学センター) 本間 康正

最近、われわれは、左肺上葉切除術および左横隔膜神経切除術施行15年後、左横隔膜弛緩症による胃軸捻転に胃潰瘍を合併した症例の胃切除術による治療例を経験した。なお、この症例は、術後重篤な肺合併症も併発し、この治療に難渋した。

術前の胸部単純写真では、左横隔膜挙上が著しく、肺機能検査においては、肺活量、二段肺活量の低下はあつたが、1秒率はあまり低下していなかつた。また、%VCは52%で、外科的適応の下界は、40%とされているので、手術は可能と判断し、施行した。

胃軸捻転は、その発症素因として、横隔膜弛緩、胃下垂、幽門十二指腸起始部の高度可動性、横隔膜ヘルニア、その他が考えられている。その症状は、急性型と慢性型に分類され、本症例のような慢性型で多い主訴は、心窩部鈍痛、胃部膨満感、便秘、嘔吐等の胃の不定症状で、比較的特有と考えられるのは、症状が食後に増悪することである。合併症としては、十二指腸潰瘍、胆石、胃潰瘍、肺炎、心不全、横行結腸軸捻転、その他の報告がある。慢性型でも、症状の強い場合、軸捻の原因となる疾患のある場合は、手術適応となる。慢性型の手術として、胃整腹術のみの術式は、ほとんど行なわれず、胃固定術、胃切除術が多い。本症例は、術後換気不全、喀痰の貯留、無気肺、肺炎等の肺合併症を併発し、その治療にバードによる補助呼吸等を施行し、全治させた。肺血流スキュンニングで、肺の機能を有さない部分が認められ、そこに喀痰の貯留が起つてしまつた事に原因が考えられる。

#### 第16回吉岡研究奨励金授与式

昭和52年度受賞者

(内科) 前田美智子

(第二病院皮膚科) 平野 京子

昭和51年度受賞者の研究発表

微小電極法によるウグイ網膜内ニューロンの同定

(第一生理) 橋本 葉子